

YNAC通信

2012.7.20 NO.29



屋久島で忘れていた何かを思い出す

松本 毅

屋久島は1993年に世界遺産に登録されて今年で19年目を迎える。1993年の入り込み客数は20万人だったのが、2011年には35万人にのぼる。また「一生に一度は行ってみたい世界遺産ランキング」において、国内では第1位の座をキープしている。

一番人気の縄文杉の登山者数も2000年では29,700人だったのが、2011年では72,159人と2.4倍に増加した。

港や空港周辺では、かつては大きなザックを背負った登山客がぞろぞろと歩いていたのだが、最近は渋谷からそのまま来たのかと思わせるようなファッショナブルな格好をした若者がキャリアバックをゴロゴロと引いて歩いている。YNACツアーへの参加も以前は数か月前から予約をしてくる方が多かったが、最近では旅行出発直前に予約を入れてきたり、屋久島に来てから「明日、何かできますか?」という問い合わせが増えた。

初めて屋久島を訪れるきっかけは「縄文杉」であったり、「世界遺産」であり、旅行パンフレットには、「世界遺産」「神秘の島」「太古の自然が残る」「パワースポット」などの言葉が目立つ。

屋久島を訪れる客層やニーズもずいぶん変化してきたようである。

また屋久島はリピーターが多い観光地でもあり、YNACのお客様の中にもリピーターが8%ほど、しかも、3回目、4回目というハードリピーターの方が少なからずいらっしゃる。

しかし、二度三度と訪れる方の中に毎回縄文杉を訪れる方はほとんどいない。また世界遺産めぐりなら二度目は他の遺産地域をめざして屋久島へは訪れないであろう。それでも何度も屋久島に足を運んでくださる理由はいったい何なのだろうか。

それは屋久島のガイドブックがたくさん出版され、女性が初めてでも一人旅がしやすくなったり、エコツアーガイドが全くアウトド

アの経験がない初心者の方を親切に導いてくれるなど、屋久島やアウトドアが身近になったことが、ハードな登山を目指す方ではない方が増えている理由ではないだろうか。また、他の世界遺産地域とは少し違った印象を持ち、何度も訪れたいくなるのではないだろうか?

屋久島で初めての一人旅を経験したり、エコツアーガイドの導きで今まで気づかなかった自然の素晴らしい仕組みに触れることにより、屋久島がその方にとって何か特別なところになっていくようなのである。

その皆さんが共通して屋久島旅行の感想で口にするのは、縄文杉や世界遺産といった特別なものとの出会いではなく、さわやかな森の空気やおいしい沢の水であったり、抜けるような空の青や鮮やかな森の緑であったり、自分を取り囲むキビナゴの群れや淡々と命をはぐむ生き物の姿であったりする。

それはかつてどこにでもあった自然であり、都会の便利さの中で失われていったものである。しかし、屋久島の森や海や川で自然の中に身を置き戯れることで、心身ともに解放され、日常生活の中で忘れてしまった何か原初的な感覚のようなものを思い出すのではないだろうか?それは、日々抱えている仕事やお金や人間関係などの欲求よりもっと命の根源的なところで欲しているものが蘇ってくるからなのではないだろうか?

「縄文杉」や「世界遺産」のキーワードで思い描いていた印象とはかけ離れた期待以上の強烈な印象がロコミで広がり、一度は行ってみたい憧れの地となり、また何度も屋久島へ足を運んでしまう原動力となっているような気がする。

屋久島は、そんな「人間」という生物としての命が存在していたことを思い出させる原始の自然が残されているところなのである。

トッピー vs クジラ騒動記

市川 聡

巡視船さつまに引かれるトッピー／水平線に夕陽が沈む

4月、今年も池田君とともにブルネイに行ってきました。美しい熱帯の朝焼け、夕焼けに心を洗われ、ピントロングやクロコダイルに驚かされ、熱帯ハイとなって家路につくはずでした。しかし熱帯の余韻を楽しむはずが、帰国してからが苦難の連続となりました。

4月20日、香港の乗り継ぎで、預けたバッグが行方不明となり、着替えも非常用装備も何もかも失った状態で、屋久島に帰ることとなりました。

翌4月21日朝、今回もリピーターの藤井さんと加藤先生に築地で朝寿司とコーヒーをご馳走となり、満たされた気分で鹿児島までは帰ってきました。ところが屋久島行き飛行機が、不甲斐ないことに天候不良のため1度も着陸を試みることなく、鹿児島空港に引き返してしまいました。この時点で次の最終便の欠航も決まり、この日の帰島はなくなってしまいました。

まあこのあたりはよくあることなので、さてどうしたものかと携帯で天気予報を調べ、なんとか翌日の飛行機は飛びそうだと判断し、地上係員の女の子に、翌朝1番の飛行機に振り替えてもらうように頼みました。ところがこの女の子が、「明日も天気が悪そうだからトッピーの方が良いですよ、トッピーの方が良いですよ。」と、繰り返し諭してくれます。「僕の携帯の天気予報によると、明日の朝はもう雨が上がっていきそうですよ。」と訴えたものの、「いやいや、今日とあまり変わらない天気ですよ。トッピーの方が良いですよ。トッピーの方が良いですよ。」と繰り返します。親切にもトッピーの時刻表を渡してくれ、「朝1便のものよりも7時45分発指宿経由のトッピーが屋久島には早く着きます。これで帰るのが良いですよ。」と教え

てくれます。まあ携帯の天気予報もあたらぬので、トッピーの方が確実だと思ひ直し、航空券を払い戻し鹿児島市内で1泊しました。着替えもないまま帰国後2泊目となりました。

4月22日朝、くだんの子が勧めてくれたトッピーに乗ったことで長い長い1日のはじまりました。一緒にこ乗ったのが池田君と石巻に帰省していたうちのかみさんと3名。混み合っていて2階席はバラバラの席しかとれないといわれたものの、2階席の方が快適だと信じていたので2階席を確保しました。この時、池田君は1階でも良いといったも

の、結果的には2階席が正解でした。

7時45分、席を替わってもらったりして、なんとか2階中央の列に3名並んで鹿児島港を出港しました。順調に指宿港に到着。ここで団体客が続々と乗り込んでほぼ満席となりました。2階席には阪急交通社の北海道、名古屋ツアーなど3つの団体が乗り込みました。

8時30分出航。この日は波の高さが6mから4mということで、佐多岬沖の揺れに備えて、リクライニングして、すぐに眠りにつきました。

8時55分、衝撃が走りました。シートベルトを支点に身体が前に飛ばされそうになり、頭が前の座席の背もたれにぶつかりました。リクライニングしていなかったらもっと激しくぶついていたかもしれません。その瞬間、部屋の前を何か飛んだような気がしました。あとから分かったのですが、2階前方中央にでんと構えていた、いかにも重そうなブラウン管の大型テレビが、ネジ留めしてあったにもかかわらず、衝撃でぶっ飛んだみたいです。直ちにエンジンが停止し、電源が失われ、船が停止しました。船内にどよめきがおき、何かと立ち上がって騒ぎ出す人もいます。

すると操舵室が開いて、「鯨にあたった。鯨にあたった。」と叫びながら、船長と機関長が走り出てきました。船長は頭から血を流し、額を押さえています。乗客の動揺を抑えなければいけない乗務員が動揺してどうする？と思ったが、興奮した様子で「けが人はありませんか」と見て歩いたあと、少し落ち着いたようで、「直ちに海上保安庁に救援を依頼しました」との説明を受けました。以前トッピーで流木との衝突事故があった際に、

何時間もかけて山川港まで曳航されたことを思い出し、これは長くかかるぞとの時思い、YNAC事務所の留守電に第1報をいれました。念のため椅子の下から救命胴衣を引っ張り出して、3名分すぐ着ることができるように用意しましたが、他にはそんなことをしている人はいませんでした。

まもなくすると左舷側に座っていた池田君が、左舷後方に血の海が見えたといいます。後ろを見に行った乗客がクジラが潮を吹いていると騒いでいるのが聞こえてきました。この状況で勝手にうろろして野次馬をやっている良いのかの思いもありましたが、せっかくなので右舷後方の扉の所から、クジラを見に行きました。9時3分、右斜め方向、船より50mくらい後方に真っ赤な血が広がっており、波の間にちらちらとクジラの背中が見えています。まず血の海の写真を1枚撮り、次にタイミングを見計らって波間に見えるクジラの背中を狙って、2枚写真を撮りました。黒々として艶やかな背中では、まさにクジラのものでした。救命胴衣を用意したものの、この血の海ではサメがうようよして、かなりやばそうに思われました。

この頃より船内では、団体旅行の添乗員達が大活躍を始めました。乗務員との連絡役を買ってでて、団体客だけではなく、乗客全員に情報を提供してくれ、毛布や汚物入れの配布、酔い止めの配布など大車輪の活躍です。しかし男性添乗員はすぐに酔ってしまいダウン。最初大活躍していた名古屋の女性添乗員さんは、最後まで頑張っていました。時々後ろに行ってはゲゲゲ吐いていたのは、気の毒でした。最後まで元気だったのは、落ち着いた雰囲気からきた女性添乗員さんでした。

さてエンジンが停止したトッピーは、佐多岬沖の高波になすすべもなく揺れ、早い潮流に流されていきました。こうなったらおとなしく寝ているしかないと思い、リクライニングしてじっとしていましたが、まもなくあちらこちらで吐く声が聞こえてきます。いよいよ状況が悲惨になってきましたが、海猿はなかなか現れません。

待つこと1時間あまり、10時11分、ついに海上保安庁のヘリコプターが姿を見せました。乗客達が一様にほっとして活気がでてきました。しばらく周囲を巡回した後、1階後部に海猿が3名下りてきて、重傷者をヘリコプターに収容しました。この間30分くらい。重傷者3名が病院へ搬送されました。今回の事故では、乗客はシートベルトをしていたので人がは少なく、「シートベルトをして下さい。」とってまわっていたお姉さんなど、乗員が怪我を負ったみたいです。このお姉さんが、ぶ

つかった衝撃で5mほど飛ばされたとか？それにしてもヘリコプターの到着まで1時間15分以上かかり、もっと深刻な怪我がいたら、間違いなく死んでいたと思われます。ただか佐多岬沖の事故で、ヘリの到着がこれほど遅いのは不思議でした。

ヘリが去ったあと、乗り込んだ保安官が、船内の統制にかりました。2階の担当は、ちょっと可愛い顔をした野村君。ニコニコした彼の顔を見て、乗客はなんとなく安心感を持ってました。1階の担当は名前がわかりませんでした。そしてリーダーは頭にタオルを巻いてやって来た福岡の古賀君。こちらは体育会系の精悍な顔をしています。1階から古賀君が「野村せんしゅ(船首)集合！」と叫んでいるのを聞いて、うちのかみさんは、「海猿ってお互いを選手って呼び合うんだね」と感心しています。。。。

今回2階の乗客は重傷者もなく比較的元気だったので、怒り出す人もおらず、実に冷静に救助を待ちました。また保安官に好意的で、状況説明があるたびに、その内容が過酷なものであっても、北海道の団体などからは拍手が起り、保安官が驚いてニコリするなどというシーンが繰り返されました。

待つこと30分、10時40分、ようやく巡視艇『さくらかぜ』が、もっと小さな船とともにやってきました。『さくらかぜ』に乗り移って搬送されるのではなく、曳航して行くということ。『さくらかぜ』からロープが発射されるが、最初トッピーとの連結に失敗。2回目ようやく連結に成功。11時15分、『さくらかぜ』(26トン)によるトッピー(164トン)の曳航がはじまりました。最初、潮流に合わせて種子島に曳航すると保安官の説明がありましたが、なぜか潮流が反対でいっこうに進まないで指宿山川港へ行く先を変更すると説明を受けました。ここまで航走してきた巡視艇が潮流の方向を読み間違えるとは思えないのですが、進まないのではしょうがないので皆だまっていた。流されているうちにいつのまにか馬毛島がすぐそこに見えています。どう考えても種子島西之表港に行く方が早そうでした。

ところが方向転換したもののトッピーはいっこうに進みません。『さくらかぜ』が右に左に見え、大きく左右に振れていることがわかります。乗務員の説明では、曳航速度は1.1ノット、時速約2kmとのこと。歩くよりも遅いスピードで、見ているように見ませんでした。おそらく流されずに現状維持するのがやっとだったのではないのでしょうか？もう1艘の小さな船は手伝うこともなく周辺をうろちまわっています。うちのかみさんは、頑張っている『さくらかぜ』をトーマス、ちょう

ちろしている小さな船をパーシーと名付けました。

これでは埒が明かないので、大型の巡視船を呼んでいるとの説明が保安官からありました。「大きな船は始動に時間がかかるのですぐには来れない」のだと、なかなか来ない巡視船の言い訳をしていましたが、それでもやはり拍手を送る暖かい乗客達。

待つこと2時間45分、14時になってようやく巡視船『さつま』(1000トン)がやってきました。さすがに大きい。さしずめゴードンといったところでしょうか。これでやっと帰れると希望が湧いてきました。しかしここからの連結作業がまた大変でした。『さつま』から細いロープを発射して、トッピーの側で徐々に太いロープへと引っ張っていきます。最初、保安官2名と乗務員2名で引っ張っていましたが、ロープが太くなるとどんどん重くなるので、乗客の男性に「手伝って下さい」と声がかかりました。元気なおじさん達が勇躍駆けつけてロープを引っ張ります。救援活動に参加できる喜びでしょうか、皆、奪い合うようにしてロープにしがみついています。ソーレ、ソーレと声をかけながら『さつま』と綱引きをしてようやく最後の太いロープがやってきました。太い部分はパワーがあり油断すると海に振り落とされそうです。最後の力を振り絞って、ようやく連結に成功。15時、曳航がはじまりました。この時点で衝突から6時間経過しています。

朝乗船して、何も食べないまま、いつのまにか3時のおよつの時間になってしまいました。しかしトッピーの中には、食べ物、飲み物が有りませんでした。機関長による説明では、飲み物の自販機はあるものの電源がダウンして使うことができないとのこと。それだけで説明をやめておけばよいのに、「以前の衝突事故の際にも、鍵を待たされておらず、パールを使ってこじ開けようとしたが開きませんでした。今回も開けることができません。」などと説明するものだから、すかさず乗客から「なぜ前回の教訓を生かして自販機の鍵を持っていないのか？」と突っ込みが入ります。こういうのをヤブヘビというのでしょうか。そうこうしているうちに、船会社が手配した食料と飲み物の差し入れ船がやって来ました。額に㊦と書いた大型の漁船のような船です。トッピーの左舷に横付けして荷物をあげようとしたところ、まもなくドーンという音とともに衝突してしまいました。当たった一と思ったら、1階から「やめろー、やめろー、離れろー」と叫ぶ保安官の声が響いてきます。2階にいる我々には見えなかったのですが、この時㊦丸の触先がトッピーの1階の窓を突き破って突っ込んだのでした。高波にもまれるトッピーの1

階窓が破れてしまい、そこから水が入ってきたらどうなったかと思うとぞっとします。しかしそんなことではへこたれない㊦丸は、今度は後部から接近し、ロープを渡して、ついににおにぎりと飲み物を配達するミッションを成功させました。

船内では早速配布が始まりました。再び添乗員さん達がおにぎり2個とペットボトルの飲み物を配ってまわります。さすがに見かねて1階への配布を手伝いました。2階と違い1階は怪我人がでたこともあってか、みな意気消沈しており、床に倒れ込んでいる人達がたくさんいます。その横で保安官がさっき破れた窓をガムテープで修復していました。そこまでして届けられた食料ですが、配布しようとする多くの方が手を横に振って「いらん、いらん」と横を向いてしまいます。見たくもないというのが本音だったのでしょうか。まさに1階は修羅場という感じでした。2階に乗って本当に良かったです。

朝飯も食べずにコーヒー1杯だけ飲んで飛び乗ったトッピーだったので、酔っていない私には、この塩だけのおにぎりがあるとありがたかったです。しかし船はあいかわらずゆっくりと走っています。16時過ぎの保安官の説明では、曳航速度は5.5ノット、時速約10kmで進んでいるとのこと、シーカヤックと変わらない速度で山川港を目指しています。あと5時間ほど上陸までかかりそうだというんでもない話を聞かされますが、それでも最後には拍手で称える暖かい乗客達。

さて電源の落ちた船に夜が迫ってきました。保安官はまもなく真っ暗になるから早めのトイレに行っておくようにと言っています。ブルネイ荷物の中には、ヘッドライトもサーチライトもあったのですが、ロスト バゲージでそれもなく、さすがにこの状況で真っ暗になると困るなと思いました。18時45分、ついに陽が水平線に沈みます。あたりが次第にほの暗くなってきました。その時、後方からサーチライトがトッピーを照らしました。何もしていないと思っていたパーシーについて出番がやってきたのです。窓から射し込むパーシーの灯りで、船内の様子が照らし出され、暗闇に閉ざされることをまぬがれました。パーシーありがとう。

19時50分、ようやく佐多岬沖まで戻ってきました。まだ激しく揺れています。遠くに佐多岬の灯台の灯りが見えてきました。屋久島灯台のところで、最近GPSなどが普及して灯台の役割がなくなってきたなどとガイドをしていたのですが、こうしてエンジンが停止し電源を失って漂流していると、遠くに見える灯台の灯りがなんと愛おしいことか。デジタルな情報ばかりがもてはやされる昨今ですが、まだまだアナログな灯台の必要

性が強く再認識されました。

佐多岬を越えてようやく揺れが少しおさまってきました。暇な我々相手に保安官の事情聴取がはじまりました。名前、連絡先の確認やクジラを見たかとか写真に撮ったかとか、これからの捜査に必要な情報をきかれました。怪我人がでていることもあり、やはり捜査ということになるらしいです。一応最初に撮影したクジラの写真を野村君に見せておいたら、後日保安庁から証拠として写真の提供を求められました。

船内では外の情報が得られませんでした。保安官の説明によると山川港では大変な騒ぎになっているとのこと。船から下りると花道に消防や警察で人垣ができており、そこを通過してメディカルチェックのテントにはいり、体調チェックを受け、それからバスに乗り込むという段取りで、マスコミが多数押し寄せられているとのことでした。中では暇なので、整然と下船するために作戦会議が開かれ、どの団体からどの順で下りましよう綿密な計画が立てられました。ところが船が接岸したとたん、そのような計画は吹き飛んでしまいました。あつというまに救急隊員や消防が多数乗り込んできて、好き勝手に下船の指図を始めたからです。もう何がなんだかわかりません。しょうがないので指示に従うと、案の定1階の下船が進んでおらず階段で渋滞する始末に。あの綿密な打ち合わせはいったい何だったんだと思わず苦笑するしかありませんでした。

結局『さつま』は予定通り21時過ぎには山川港沖にたどり着いたのですが、『さつま』では大きすぎて、トッピーを接岸させることができないということで、小型の船に繋ぎ変えて接岸を試みました。しかし強風のため最初は接岸に失敗、風がおさまるのを待って2度目の挑戦でようやく山川港に接岸できました。この時すでに23時となっていました。鹿児島港で乗船してから15時間15分、クジラに衝突して漂流をはじめから14時間が経過していました。

山川港は、保安官の話の通り、人垣の花道ができており、大変な騒ぎとなっていました。乗客184人に一人ずつ番号札を着けて、メディカルチェックを行い、宿泊先へ誘導する準備が整っていました。これだけの準備をするには、種子島では難しかったのかもしれませんが。とは言えメディカルチェックは、「どこか具合悪くありませんか？」と声をかけられただけで、元気な我々はほほ素通りでした。この外では、マスコミが待ちかまえており、我が池田君がNHKのインタビューに答え、堂々全国ニュースデビューを飾りました。たくさんのインタビューの中で彼が選ばれたのは、沈着冷静な状況報告と疲れ切った表情

のせいでしょうか？

こうして我々はバスに乗り込み、この日も屋久島にたどり着くことなく、帰国後3泊目の宿泊先、指宿いわさきホテルへと運ばれていきました。ホテルに着いたのは、既に0時前でした。ホテルでは、もう砂蒸し温泉は終わっていると言われましたが、豪華なバイキングを用意して待っていてくれました。食事会場の入口に立っていたちょっと偉そうな男性に、「とりあえず生ビール！」と頼んだところ、「すみませんお客様、ビールは別料金になります。」といわれ、「えええええ * @ & % \$ ~ ? 」と叫んだところ、「失礼しました。船会社につけておきます。」ということになり、翌23日0時過ぎ、ビールで乾杯することができました。奇しくもこの日は私の51回目の誕生日でした。朝からおにぎりしか食べていなかったため、豪華な料理をたらふく食べ、そしてデザートには池田君が取ってきてくれたケーキを食べ、思いもかけぬ誕生日ディナーを終了しました。温泉で疲れを癒し、この夜はさすがにぐっすりと眠りました。

翌朝再び同じ時間のトッピーに乗船し、屋久島を目指しました。名古屋の団体は脱落しましたが、北海道の団体は再び同じ船で屋久島を目指しました。もちろん全員シートベルトをしていたのは、いうまでもありません。おだやかに何事も起こらず、今度こそ屋久島に帰ってくることができました。

帰って南日本新聞を見ると、トッピーの前方の水中翼はもぎ取れ、船底には大きな穴が開いていました。保安官は「沈まないから安心して下さい。」と言っていましたが、事故は想像以上に深刻だった模様です。また翌日、海上保安庁が発見したザトウクジラの死体は、サメがうようよして回収できなかったとか。沈んでいたら本当にえらいことでした。兎にも角にも無事帰島することができ、関係者の皆様に感謝をするとともに、気丈に働いてくれた添乗員の方々、冷静に助け合って救助を待った乗客の皆様を称えたいと思います。くれぐれもシートベルトは忘れずに。



インタビューに答える池田君(NHK)



2012年4月に「風の旅行社ツアー」のボルネオ島ブルネイ・ダルサラーム国ツアーが催行されました。市川さんが講師を務めるジャングルツアーです。珍獣ハンターを目指す私には格好の修行の場。人食いワニや噛まれたら1時間以内に死んでしまう強力毒ヘビ、猛烈なトゲ植物に行く手を阻まれながら出会った珍獣珍草のご紹介。

■サイチョウ HORNBILL

～イクメンババはマメ男な怪鳥～

ブッポウソウ目サイチョウ科

サイのような角を持つ熱帯の怪鳥。大型種はカラスの三倍は大きく、鳥が恐竜の子孫であることをうっすら感じさせてくれるほど。声が大きく、カラスなんかよりもはるかに大声で鳴く。ジャングルの朝のモーニングコールが、サイチョウだったこともある。ジャングルに挟まれた川の上空を優雅に滑空する姿は圧倒的な存在感があり、鳥に全然興味がない私でも鳥好きになった。Amazon でボルネオの鳥図鑑を買ってしまったほどだ。大型鳥は素晴らしい。

高木のウロに営巣し、メスはオスから餌を受け取るための非常に狭い隙間を残して樹のウロの入り口部分をふさぎ、その中で産卵、子育てをするという。オスは日に数回から十数回にわたり、巣のメスに木の実や小動物などの餌を運んでくる。とてもマメで家庭を大事にする、今の俗っぽい言葉でいうイクメンだ。大変知能が高い鳥で、犬並みかそれ以上の思考分析能力をもつとも言われる。

貴重な原生林が残るブルネイのジャングルで割と普通に見ることができるが、森林破壊の進んだボルネオのほかの地域ではあまり見ることができない。世界的に大変貴重な鳥で、このグループを目標に世界中からパードウォッチャー達が集まってくる。

単独行動もするが、ペアやペアとその子供などで採食、飛翔しているところをよく見ることができる。今回はオス同士が3羽で採食しているところを観察できたので、メスはウロの中で育児中なのかと想像できた。

■ピントロング BINTURONG

～まっくらくろすけでおいで～

ネコ目ジャコウネコ科ピントロング属

ジャコウネコの仲間の最大種。中型犬くらいの大きさ。多くの人が「んん？ジャコウネコ？」というくらい馴染みがないグループだが、ハクビシン(白鼻芯)という種類が日本に生息している。ハクビシンは2002,3年にSARSウイルス騒ぎでアジア一帯を恐怖のどん底に陥れたあのウィルスの保菌者として疑われたのだ。

その後アメリカの大学の研究で自然宿主はコウモリだったという話。濡れ衣を着せられたハクビシン…かわいそうに。コウモリはいろんなウイルスを

媒介する(人獣共通感染症)で私は極力近寄らないようにしている。

さてピントロングは私にとって特に思い入れのある動物の一種だ。初めての出会いは水泳部で体を鍛えていた青春真っただ中の16歳の頃。その頃からすでに珍獣好きだった私は東京・東中野にあったアニマルマーケット「動物堂」によく出入りしていた。ここは珍獣を得意としていたペットショップで、当時私は小動物や特殊動物の獣医になりたいと思い、獣医になるための情報収集をしていた。しかし今思えば、動物好きだと将来なりたいた職業がなぜ獣医さんなのだろうか。安直すぎる。

動物堂のドアを開けると特有の獣臭がし、得体のしれない生き物たちがうごめく音がした。ナマケモノに腕をつかまれたり、キバタンオウムに腕時計をかじられたりしながら奥へ進むと、黒い大きな毛玉がいた。ピントロングである。やたら愛嬌のある顔と、猛烈な剛毛くせつ毛のソイツは、ただもしゃもしゃとバナナを食べるか、スペースピーと寝ていた。エサ入れの洗面器を枕にして寝ているもじゃもじゃの黒い巨大な毛玉は、珍獣の多い動物堂の中でも特に異色の存在だった。離れた目がかわいらしい憎めない存在のキャラに魅かれ、いつか自然の中で見てみたいと思ったものだった。ジャコウネコは主に夜行性で、自然状態での観察は難しい。

ところが！ツノサイチョウ数羽を観察していた時に「出た」のだ。ピントロングが！朝一番のポートクルーズでの出来事だった。キャノンの望遠レンズを構えていた私は、高木に止まるサイチョウにまっすぐのしのし向かっていくピントロングを、撮影することを忘れて呆然と見ていた。逆光条件のため写真はあまり期待できないと思い、ほぼノーファインダーで撮影したものがわずかに数枚。写真を撮ることより、実際にあこがれていた動物に会えた感動がたまらなかった。

ピントロングに憧れる男も滅多にいないだろうけれども、野生のピントロングは檻でもぐぐバナナを食べていた毛玉とは雰囲気の違い、明らかに身軽、野生を感じた。ピントロングはサイチョウ同様に開発に住処を奪われ、大変希少な動物。なかなかお目にかかれない珍獣の中の珍獣である。

ちなみにピントロングは語源はマレー語らしい。意味はクマのようなネコということらしいが本当かどうかは不明。実際はクマでもないしネコでもない。リアルなトロがいたら、ピントロングみたいな感じでいいと思う。



■ネペンテス NEPENTHES

～トランペットのような摩訶不思議食虫植物～

ウツボカズラ目ウツボカズラ科

食虫植物は中2のころに近所の熱帯魚屋にて500円で買ったハエトリグサを栽培して以来、その魅力的なカタチの虜になっている。ほかにサラセニアやドロセラなどペランダや窓際でちまちま育てていた。大好きな植物のグループ。

食虫植物は貧栄養の環境で育つ。虫を捕るのはミネラルやたんぱく質(窒素栄養)などを補給するための仕組みなのだろう。ジャングルで出会った食虫植物ウツボカズラは、見るからに痩せた土地、薄暗いところに生えていた。しかし高速道路の脇、直射日光のあたるところに生えているものもあり、

今回はそこでネペンテス・ラフレシアーナを観察した。ネペンテスとは和名ウツボカズラという食虫植物で、虫を捕る部分がトランペット状のツポになっている例のアレである。

群生していた場所はケランガスと呼ばれる白い砂地で、直射日光が良く当たり、照り返しが強く、風通し良い場所だった。ウツボカズラは低地から高地まで幅広く分布し、環境に特化した種類も多く、高山植物のように低温・高湿度を好む種もいる。基本的には空中湿度が高い場所が好きグループ。

今回観察したラフレシアーナの群生地は乾燥した空気が流れる風通し良い場所だったので意外だった。夜は霧が出るのだろうか。

葉の先からニューハットツルのようなものが伸び、その先端が徐々にトランペット状になって、捕虫葉が十分大きくなるとフタがバカッと空く。その過程の様々なタイプの大きさの捕虫葉を観察でき、ツアーに参加した女性から、ウツボカズラの神秘的造形に感嘆の声があがった。

なお、東京の都市伝説でウツボカズラを枯らすと崇られるという話がある。ウツボカズラは決して栽培が簡単な植物ではないので安易な購入は控えたほうが良い。興味がある人はジャングルの野生株を見に行くことを、お勧めしたい。

■オランペンデク ～水曜スペシャル 原始のジャングルに謎の類人猿は存在する!～

割と有名な未確認動物

ジャングルの動物なら何でもお任せスーパーガイド、ジャングル・デイクに、気になっていた疑問を投げかけてみた「オランペンデクは見ることができているのか?」

オランペンデクとはスマトラ島に住むといわれる妖怪じみた存在で、マレー語で「小さな人」の意味。古くから存在が噂されている未確認動物だ。新種の類人猿という話もあるが、何せまったく証拠のない存在。ここボルネオ島でもその存在のうわさがあったのだ。

私のからかうような質問に対し気分を少々悪くしたのか、いつになくキリッとした顔でデイクはこう答えた

「2007年に見たことがある」

「えええええ!?あるのかい!!!」

ジャングルデイクは動物のことにいつも真剣で、誰よりもボルネオの動物に詳しい。アジアだけにどまらず、世界中の大学・研究機関と連携し、貴重なボルネオの自然を研究する学者気質も備え持つ。

彼のマイブームはシンガポールの大学の先生との共同研究で、クモの採集と新種発見だ。さっそく新種をすでに10種類近く見つけているらしい。そんな研究熱心なデイクが、驚愕している私に対し、淡々と語り始めた。

「オランペンデクは全身に赤い長い毛が生えており、犬歯のような牙をもつ。身長は約3フィートで、二本足で人間のようなスタイルで走ることが可能だ。ピートスワンプ(泥炭湿地)のジャングルで足跡を残さず走り回る。

どうやら地底に住んでいるようで、ピートスワンプなどに生える植物の根が地下に造る巨大な空間に潜んでいるようだ。」

「私は●●という場所で2007年に国が行ったジャングルの地下石油資源調査の際、森に穴をあけるための爆弾に驚いて出てきたと思われる2頭に遭遇した。彼らは何かをしゃべり、その後すぐに二本足で走ってどこかへ行ってしまった。あれは幻ではない、私は疲れていなかったし、もちろん飲酒やドラッグもしていない。前に雇っていた私の部下も同じような遭遇をして、彼は『ゴースト(幽霊)にであった!』と恐怖で泣きわめいていた。日本人の研究者もフィールドワーク中にオランペンデクに遭遇したことがあると聞いた。スマトラ島で目撃例が多数あるようだが、ここボルネオにもいると思う。」

「今度購入予定の赤外線カメラトラップで映るといいな。なにせこのオランペンデクは物的証拠が何も無いんだ…私が何を言っても、証拠がなければ信用してもらえないのさ…」

私は決して彼の話を嘘やジョークだとは思えない。彼はジョークが好きだが、ジョークを言う時の会話の抑揚はなく、自然解説をしているときの真面目な声だった。

オランペンデク、仮に彼が言うように「地底に住む猿」だったとしたら面白い。

地底人じゃないか、ますます話が怪しくなってきた。

ここまで書いてしまうと水曜スペシャル川口浩探検隊のようだが、何でもインターネットで情報収集できてしまうこの時代に、「そんなもんいるはずがない」といわずに酔狂なまでに存在を追いかける地道なアニマルウォッチャーの姿ジャングルデイクの姿勢に感動した。ぜひ本物を見てみたい。

ジャングルの奥地に、オランペンデクは存在する!!

■ジャングル・デイク ～やっぱり一番の珍～

ヒト科ヒト属ヒト

ボルネオ島でおそらく一番野生動物に詳しい男、ジャングル・デイク。彼は独学で野生動物について学び、なんと半年間もジャングルにこもり、ボイスレコーダーを持って鳴き声のする方向へ走り、声を録音しながら姿を確認し動物の種類を覚える、という超人技でスキルを身に着けた。図鑑で読んだ知識、というレベルの私とはまるで住む世界が違う。すべて実体験をベースに自信を持ってジャングルを語ることのできる男。

話によると昔はカラオケマシンの営業マンだったらしいが、とにかく動物が好きでジャングルに入ると目が変わる。人と話しているときでさえ、はるか遠くの鳥や獣の鳴き声や、木々の間をうごめくシルエツを見逃さない。100m離れた倒木の上でひなたぼっこする、泥色をしたカメを見つけたり、時速50km以上で水上を走るボートの上から、両脇のジャングルに潜むサルやサイチョウを発見したりする。

驚いたのが、そのような状態でリスなどの小型獣も発見できるのだ。視力はいくつくらいあるのだろうか。動物視力もさげれば抜けていいに違いない。とある植物研究者からの話によると、野外で鍛えている人は周辺視野が、ものすごい性能が良く、じっと目を凝らして観察するよりも、ある程度視野の動く中で、目の片隅に映り込んだ対象を分析する能力が異常に高まるらしい。確かに知人の昆虫好きや蘭好きも同じような技術を持っている。

ボート上でサイチョウやサル探しをしていた時に、河で泳いでいるヘビを見つけ、私が持参した手網で捕獲しようすると「NO!! One bite, You Die!!(ひと噛みであの世行きだぜ!!!)」と厳重注意を受けてしまった。不覚にも超猛毒のアマガサヘビだとわからなかったのだ。アマガサヘビはウミヘビやコブラに近い毒蛇で、一歩間違えたら大変だった。ちょっとしたスリリングな体験だった。しかし泳いでいるヘビを一瞬で見分ける観察眼は大したものだ。ジャングルにはヘビの種類が多く、似たようなものも多い。

彼の魅力はその卓越した「観察眼」と、トークテクニックだろう。英語があまり得意でない私にも、よくわかる丁寧な説明で、ときどきジョークもはさみ、大変楽しい解説をしてくれる。ジャングルの面白さと危険性を熟知した彼についていけば、本当に素晴らしいジャングルを体験できる。未体験ゾーンの圧倒的スケールの大自然に、感動して震えた。地球に生まれてよかった!と心から感謝することができた。

さあ、パソコンやスマホをカチカチいじるのを止めて、どーん!と一緒にジャングルへ行きませんか? 屋久島の自然体験を超える刺激と癒しが待っています。さあ、ジャングル・デイクに会いに! レッツ・ゴー!!ジャングル!!



ジャングルで珍鳥のサイチョウを見つめるジャングル・デイク。



人生、気掛かりな事がいくらでもあるものの、とりあえず今は健康だし、私は、カメラと、それらにかかる出費、あとは美味しい飯を安く作る方法について、よく考えるようになりました。そしてそれは、そういう事を考えなきやいけなくなったからでもあります。

何事もお金をかければ、それなりの物ができますが、「工夫の楽しみ」や、「目標予算内で仕事をこなして、稼ぎを増やす楽しみ」が無くては、つまらない。また、そういった方法がお客様に伝われば、お客様にとって、大きな楽しみや思い出、そして技術習得につながるでしょう。そういえば5月に案内したお客様から、「こんな写真を撮りました」と作品を頂戴しました。機材はPENTAX「K-5」、お友達の結婚式撮影に使ってから久々の出番だったそうで、めったにお目にかかれない機種。一度試してみたかったので、私も色々使わせていただきました。



紀元杉がこんなに重厚に撮れるとは。ペンタックス、改めて拍手。

さて、縦走から日帰りまで、よっぱどの雨でなければ、食事は何でも作ってみよう。「野外活動総合センター」なんだし。というわけで、「ホットサンド」「塩麹漬け肉のドンブリ」「燻製飛魚の Pasta」「燻製飛魚のスープ」「豆乳ポタージュ」をやってみます。全部、妻のアイデアです。

ホットサンド 1人前 ¥140-ぐらい

パン屋さんで、食パンを1.3mm厚にスライスしてもらおう。この厚みで、私の使うタッパーに4枚重ね×2でピタッと収まる。(タイトル写真参照) ガス用のホットサンドメーカー「BowLoo」で挟んで焼く。中身は
 ・ガーキンピクルス一本(一本を6枚にスライス) ¥15-
 ・とろけるスライス一枚 ¥25-
 ・ベーコン(パン並みに広げる) ¥20-
 ・ケチャップ・タルタルソース・粒マスタードを適量 まとめて ¥40-
 以上を パン2枚(¥40-)に挟む。
 サンドイッチには、酸っぱい物があつたほうがいいです。レタス等あれば、なおいいですね。

塩麹漬け肉のドンブリ 4人前 ¥700-ぐらい

鶏ムネ肉を2cm厚ぐらいで(一人4切れ)、塩麹に漬けて運ぶ。現場ではフライパンでトマト・玉ネギと共に炒める。ごま油と塩コショウ。火が通ったら水100ccとコンソメでもうどんスープでも醤油でも足して、溶き卵でゆるく閉じる。炊いたご飯にのせて簡単親子丼。
 ・ムネ肉 16切れ 塩麹漬け ¥250-
 ・トマト 1個 ¥130-
 ・玉ネギ 1個 ¥40-
 ・コンソメあるいはうどんスープ 1個 ¥15-
 ・卵 2個 ¥30-
 ・米3合 ¥240-

燻製飛魚の Pasta 4人前 ¥950-ぐらい

Pastaですからね。麺を茹でながら、ソースを作って、後で絡める。最後に、とろけるスライスをのせて、バジルと塩をふってイタダキマス。トマトソースの酸味消しに、「味噌と砂糖」ってのは、感心しました。
 ・燻製飛魚 ¥525-
 ・Pasta300g ¥200-
 ・カットトマト缶400g ¥100-
 ・味噌大さじ3杯 砂糖大さじ1杯 合わせて ¥20-
 ・とろけるスライス ¥25-(4人で ¥100-)

燻製飛魚のスープ 4人前 ¥600-ぐらい

ガス代と現場手間の節約で、熱湯を持っていきます。コンソメを溶かして、具を入れて、卵を溶き入れるだけ。コショウか生姜、ニンニクが入っても美味しいです。
 ・燻製飛魚 ¥525-
 ・コンソメ3キューブ ¥45-
 ・卵 2個 ¥30-
 具を工夫すれば、(たとえば鶏モモ肉とトマト)、ポトフっぽく おしゃれにできます。

豆乳ポタージュ 4人前 ¥360-ぐらい

豆乳と同量の湯に、コンソメを溶かしてから豆乳、コーン、ベーコンを入れて、沸騰直前までコトコト。塩、ニンニクも入れる。
 ・紀文の調整豆乳 200ml×2本 ¥200-
 ・コンソメキューブ×2 ¥30-
 ・スイートコーン一缶 ¥100-
 ・ベーコン 2枚 ¥20-
 ・塩とニンニク ¥10-



鶏肉・トマト、ゴマ油と塩コショウ。これにチーズが載ればイタリアン。



ホットサンドが、うまくできたので、iPhoneで撮ってみる。



焼きたては熱いので、やけどに注意。



ホットサンド贅沢版だと、角煮を入れたり。



ピクルスは、スライスしてから、市販キムチの器に入れ替えます。



豆乳スープ。バジルと塩とニンニクで、美味いと思えるようにする。



トマトサーディン(チリ味)一缶 ¥100-。これでPasta4人前できる。



燻製飛魚入り トマトソースがけPasta。チーズと山椒のせ。

安房に住んでいますので、買い物は「Aコープ」と「たなか屋」です。Aコープは、すぐ隣に「漁協特産品市場」があり、燻製飛魚が買えます。
 ・たなか屋はPM9時ごろまで
 ・AコープはPM7時-8時まで(冬と夏で変わる)
 ・漁協はPM5時まで。



普段使いの焼肉パックも、野菜とソースでかなり美味しくなります。10月過ぎれば、豚コマ味噌漬けとカットレタスで、簡単焼肉。夏は傷みやすいので、葉っぱ物は避けて玉ネギを使います。贅沢より工夫。ステーキ肉を凍らせて運び、山で焼いた事もあります。ワインがあると最高。「頑張ってたかた〜」と思えます。心から満足感を得られる、体にも栄養のある美味しい食事を！軽量化と防菌には十分な注意を！今日もまた、枕元の料理本で眠りにつきましょう。



冬の北海道遠征

比留間 雄太

屋久島の観光は12~3月の間、静かになる。この4ヶ月の間、北海道占冠村のスキー場へ冬修行に行ってきた。ここは、今季最低気温-31.4℃(2012/1/26)を記録するほど、北海道の中でも極寒の地である。温暖湿潤な屋久島とは真逆の環境ではあるが、多様な自然を持ち合わせるこの日本を、この身を通して経験できることは嬉しいことであった。

とはいっても、やはり北国は寒いもので、12月初めにまず札幌に到着した時、町中を歩く女性達が手袋も着けずに平然と歩いている姿に驚いたり、前が見えない程の吹雪にあったり、温暖地育ちの僕は少し不安になった。だが、それ以上に、北海道の未知の生活に期待を感じる時でもあった。

●今回の遠征目標。

1、スキー技術の上達、2、バックカントリースキーの経験、3、北海道の自然を肌で感じる。

1、スキーは小学生から始めたが、本格的に練習するのは今回が初めて。今のレベルがどの程度なのか、まずは、全日本スキー連盟(通称:SAJ)バジテストの1級を受ける事を一つの目標にした。ただ、現在の主流のカービングスキーは以前のストレートのとは、ターンの仕方が全く違う。感覚の違いに戸惑いながらも、少しずつ内足感覚に慣れてきて、コツを掴むと、今までの滑り以上にターンがグイグイ回るようになった。今更ながら、カービングスキーの面白さを知った。また、ただ滑るだけでなく、ジャンプ、ハーフパイプ、レール等の、トリッキーな滑りにも挑戦し、自分の課題がどんどん増えいき、どれだけ時間があっても足りないくらいであった。ただ、目標にしていたバジテストは1級合格に2点足りず、悔しい2級取得で終えた。(1級を取得し

たら、フリースタイルスキーに転向しようと思う。)

2、ゲレンデ外の雪山を滑る、バックカントリースキーにも挑戦した。これは、ゲレンデではない場所を自力で苦労しながら何時間も登り、下りは一瞬で滑り降り。1本を大事に滑る感覚や、人が全く滑っていない雪の中を進む優越感はとても新鮮だった。ただ、管理されていない場所であるため、冬山の知識、読図、体力が必要になる。少しずつ確実にレベルアップして、今後もチャレンジしていきたい。

3、期間中の体験。

スキー(屋間15回、ナイター20回)
旭山動物園、北海道大学、釧路湿原、屈斜路湖、阿寒湖、洞爺湖、登別、層雲峡、アイヌ民族博物館、紋別の流氷、小樽運河 etc。
北海道の開拓の歴史は、この100年の事だという。全国各地からこの地に移り住んできた。北海道は、広大な牧場、農場が地平線までずっと続くだっ広い景色がよく見られるが、この開拓によって作り出されたものとそれ以前のアイヌ人の生活等の関係など、今の景色を見ていると歴史を感じずにはいられない。(ニュージーランドでも同じ感覚を抱いた。)わずか100年の間に、広大な森林を切り崩し、耕し、今の北海道の景色を作り出したのだろうか。今後、北海道の歴史はアイヌ文化と共に知りたい事の一つになった。

4ヶ月の間、ずっと「白」の世界。「冬は何もないから嫌いだ」という道民の声も多く聞いた。僕は、南の屋久島にいるからこそ、より北国の色々を味わえたのだろう。「日本は広いなあ。」各地を歩いて、家に帰ってくると毎回思う。



屋久島銘水うどんを食べよう!

池田 裕二

■なぜ屋久島で五島うどんなのか
上五島の浜崎製麺所の浜崎社長が観光連合の屋久島視察で来島された際に、白谷雲水峡をご案内しました。そこで屋久島の水のおいしさに感動された麺匠浜崎氏が「ぜひ屋久島の水でうどんを作りたい」とおっしゃったので、「じゃ水を送りますよ」といって白谷川水系の羽神の滝の水を送ったところ、うどんになって帰ってきて、これがめっちゃ美味い!是非商品化しようということ生まれたのが「屋久島銘水うどん」です。

■うどんの素材の良さ
味、コシなど吟味して匠が選抜いた小麦粉に、くわえる塩は「とっぺん塩」。自然の恵みを生かした海水をこだわりの製法で太陽と潮風でじっくりと造る塩で、全国的にも完全天日干しの塩は非常に少なく貴重な塩だそうです。なお、油を使わずに練る不油完熟麺。

■屋久島銘水うどんを食べることができるのは YNACのツアーだけ!
スノーケリング、ダイビング、カヤックなどのツアーで屋食に準備いたします。(カヤックでは少人数の時のみ。稀に宿泊登山で出ること。)
噂が噂を呼び、「うどん指名」でリバーカヤックツアーを申し込みましたお客様もいらっしゃいます。

屋久島のおみやげは...笑顔

松本 淳子

遠路はるばる屋久島までおいでくださるお客様は、休暇中の仕事に支障がないようにおそらく前日まで忙しく働いてこられているのでしょうか。

更に飛行機や新幹線、船を乗り継ぎ、ようやく屋久島に到着した時には、気持ちは高揚しつつも、身体には疲労が蓄積したまま...ということになってはいませんか?

屋久島の自然の癒しパワーをいっぱい受け取るために、屋久島に到着したらまずは凝った心身をほぐしませんか?



■トッピングで屋久島の名産を堪能
まずはうどんだけをつるつると味見してください。天然塩の味が効いた、なめらかでコシのある麺そのものの風味が素晴らしい...そして、次は麺つゆ(おすすめはサバ節使用「屋久の露」)とうどんだけで、うどん本来の味をシンプルにお楽しみください。そして屋久島らしいトッピングをお好みで入れて、「屋久島銘水うどん」の完成!!

さば節...言わずと知れた屋久島の名物。焼酎のおつまみとして屋久島では定番です。
屋久とろ...屋久島で人気の山芋とろろ。フンドーキン(甘口刺身醤油(松本社長愛用)をちよっとたらすと美味。長〜く伸びる腰の強さで人気。
塩らっきょう...屋久島では酢らっきょうではなく塩らっきょうが人気。市川家特製は隠し味に三岳が入っている屋久島スペシャル。残念ながら非売品です。
きざみのり...鹿児島県出水産をAコープでゲットしよう。

■お買い求めは、YNAC 他、安房の杉の茶屋(屋久杉自然館)、麦生のポンタン館(トロキ滝前)、空港前のまんてんマーケットなど、1袋3人前525円

YNAC事務所でこの夏から行う予定の笑顔施術は、肩や首のコリもほぐれますし、顔や頭部のツボを刺激することで疲れた眼はすっきりし、表情筋のコリもほぐすというものです。自然の中で思い切り笑うための準備ができますよ。

また長時間の乗り物での移動で脚のむくみや腰の違和感がある方も、あらかじめほぐして翌日からのアクティビティに備えることをお勧めします。

もちろん屋久島で思い切り楽しんで帰る間際、ちょっと時間があるのでお土産でも...と思っている方にも、YNAC事務所で笑顔施術をお土産にしませんか?

そう、屋久島のお土産は...笑顔です。

笑顔施術は男性の方もどうぞ、むしろ男性の方にこそお勧めです。

屋久島の中世史 倭寇経済とヤクスギ伐採の始まり

屋久島の周辺で、何が起こっていたのか

小原 比呂志

ヤクスギはその体内に、歴史を文字通り体現している。幹に刻まれた年輪の幅の中には、その年に造られた組織の実物が保存されている。巨大な立ち姿を見上げると、その年月の存在感に圧倒され、おのずから畏敬の念が湧いてくる。

ではその長い時間を共有してきた屋久島の間人側の歴史がどういうものだったか。これには謎が多く、中世以前の屋久島についてはほとんどわかっていない、と言った方が正確だろう。関連する1次資料があまりにも乏しく、屋久島の実像を描きだすには、まったく不十分なのだ。

しかし、どんな地域でも、よそから閉ざされていることはない。島は海によって隔てられる孤立したものと考えられがちだが、実はそうではない。むしろ外部との経済的、あるいは人の移動にともなう民俗的な関連によって島社会は形成される。歴史の主体が島そのものではなく、地域をとりまく外部であることすらある。島世界においては、海は隔たりではなく、むしろ人や物の交流を無限に広げる通路なのだ。

だから屋久島の歴史を知りたいと思ったら、島の周辺がどのような世界だったかを知っておくことが不可欠だ。その上に屋久島に関する断片的な記述をのせてみることで、初めてそこに描かれたことの意味が浮かび上がってくる。

屋久島の社会体制がどのようなものだったか。律令時代には、南西諸島全般をさす言葉として「ヤク」が使われていたらしい。その名残が有史以前から珍重されてきた「夜光貝」だ。ヤコウガイ、と読むが、これは古代にはヤクウガイないしヤクガイと発音されていたと考えられる。もともと島の名と貝の名と、どちらが先かはわからない。

「ヤク人」のほうはごくたまに古代史に名がでてくる。が、その範囲ははっきりしない。屋久島がはっきりと歴史に登場してくるのは、その領有権が初めて主張される種子島家の史料からだ。

屋久島領有の始まり

1185年 壇ノ浦で平氏が敗北した。種子島家譜によれば、「種子島家初代信基(時信)は平行盛の子で、平家滅亡時に幼くして北条時政の養子となり、肥後守を号し、多祢島、屋久島、永良部島、硫黄島、竹島、七島、凡そ十二島を賜わった」とある。

これが屋久島の社会体制がはじめて現れた資料だ。種子島家の成立を示す正式文書なわけだが、家譜の最古の部分だけに、さすがにおぼろげな印象がある。系図として平氏を祖とする家柄の正統性の主張として書かれただけなのかもしれない。

ではこの記述のまわりには何があるのだろうか。「1192 作ろう」は鎌倉幕府の成立だ。源頼朝が征夷大将軍となるのだ

が、実際に実権を握り幕府を運営したのは源氏の後ろ盾となった北条氏である。北条家主流を北条得宗と呼ぶ。

平氏は清盛の猛烈な手腕によって瀬戸内海から九州の、そして宋との海上交易利権を独占し、経済的支配者となったとされている。その後を受け継いだ北条氏は、全国の重要な港湾を拠点として北条本家(得宗という)とその一族・直属の家臣でおさえた。

また種子島には古くは律宗寺院があったと「種子島家譜」にある。この律宗とは奈良の西大寺を本山とし、北条家と結んで発展した教派だった。

鎌倉から中世にかけての仏教は、今の仏教法人とはまったく違う存在だった。

仏教寺院は、信仰、蓄財、金融、学問などを請け負って巨額の資産を蓄え、豪華な寺院の建築や港湾整備、それに大陸貿易まで手掛ける経済体だった。比叡山のように軍隊を有する場合も多かった。そのあり方は時代によってさまざまだが、現在でいうなら、銀行と保険会社と商社とゼネコン、場合によってはメーカー、さらには大学の機能などを兼ねそなえた存在だった。奈良の興福寺や後の本願寺など、地方領主として君臨した例も少なくない。各地の末寺は、本社に対する支社にあたる。律宗は北条氏と組み、得宗支配と連動して全国に末寺を展開した大企業体だったらしい。

北条家養子の種子島家初代信時が薩南諸島に配され、かつそこに律宗寺院が存在したという記述は、系譜が事実かどうかはさておき、この北条得宗の支配と律宗の全国展開に符合する。つまり種子島とおそらく屋久島は、交易拠点のひとつとして、鎌倉幕府の全国統治に組み入れられていたことがわかる。

薩南諸島ではどんな商品が運ばれていたのか？

では、交易の拠点としての薩南諸島にはどういう利点があったのだろうか？

先ほど述べたヤコウガイを始めとする貝は、それこそ神代の昔以前から重要な産物だった。たとえば種子島の広田遺跡では弥生時代に流行したらしい装飾用プレート「貝符」が出土している。これにはなんと「山」という文字が刻まれており、日本で発見された最古の漢字とされている。また通貨や装飾品として需要が多かったらしいタカラガイなどの貝も、南西諸島から九州経由で大陸に運ばれていたらしい。

ついで重要になるのは硫黄だ。10世紀末、日本から宋に硫黄を輸出した記録がある。黒色火薬兵器の使用が始まっていた宋では、原料の一つ硫黄をシルクロードから運んでいたが、西域との戦乱で取り寄せることができなくなった。そこで日本からの輸入が計られた。その採掘地が薩摩硫黄島(鬼界ヶ島)だったのである。

平清盛は、大宰府を勢力下に置くとともに、大隅八幡宮(現在の鹿児島神宮。鹿児島県霧島市)親交をもち、この薩摩硫黄島の硫黄を宋へ送っていたらしい。俊寛らが島流しにされたのは、この硫黄運搬のための商船ルートあつてのことだっただろう。

北条氏が硫黄を商品として扱ったという資料は残されていないが、14世紀には琉球が硫黄島島の硫黄を交易品として送りだしている。その後15世紀前半には島津氏が勘合貿易での薩摩硫黄島の硫黄の利権を握ったことが明らかになっており、薩摩と琉球の硫黄がアジアの火薬を支えていたという。

13世紀の中国側の記録に、日本商人の販売する材木や硫黄は、国主や重臣の貿易品であるものが多い、との記述がある。これはまさに北条得宗が、硫黄のみならず、材木を輸出していたことを示す資料だ。この材木の種類は何で、どこで生産されたものだろうか。非常に興味深い。

なお、14世紀初頭、尾張から出た千竈(ちかま)氏に関する面白い記述がある。千竈氏は海洋的性格の強い武士団で、北条得宗被官として常陸、駿河、尾張、薩摩河辺郡など全国に所領を広げていたらしい。1306年、千竈時家が家族に薩南の島々を分けて相続しているのだが、そのさい娘の1人「『いやくま』に、『やくのしまのしもこおり』」が与えられているのである。下屋久つまり屋久島の南半分の利権のことだろう。千竈家は薩南海域の海上交通に関わる通行税が取引税のような権限を持っていたと考えられる。海賊的領主かもしれない。このあたり、種子島氏との関係は不明だ。

琉球の台頭

1361年南北朝時代の大混戦の中で、南朝方の懐良(かねなが/かねよし)親王と、名将菊池武光が大宰府を制圧。九州を勢力下においた。ちょうどそのころ(1371)明が鎖国を始め、朝貢国以外の船の入港や私貿易を禁止する(海禁)。このとき懐良親王は日本国王名義で明の冊封を受け、なんと九州を外交的に独立国化してしまっただけである。日本代表が正式に承認されてしまったので、北朝方は政権をとったにもかかわらず、国家間の交易利権を一時的に失った。

不自由な海禁の反動で、東シナ海では私貿易が一気に盛んになった。これが前期倭寇である。東シナ海は実力がものを言う海賊世界となり、略奪、人身売買、裏切りなどなんでもありの、ある意味猛烈に活気のある非合法時代が始まった。

この混乱の中で力を伸ばしたのが、琉球だった。14世紀前半まで、博多と今の杭州に近い寧波を結ぶ大洋路が交易のメインルートで、南島路はサブルートにすぎなかった。あるいは琉球の品物は九州へ北上して、朝鮮や中国へ運ばれることが多かった。しかし14世紀中頃から元末の内乱や倭寇の活発化によって治安が悪化し大洋路はぶっそうで使いにくくなった。

そこで、代わりに肥後高瀬津～薩摩～琉球～福建の南島路が交易のメインルートとされるようになったのだ。海の道には港が必要だ。ルートの要となる琉球で、那覇が200トンクラスの大型外洋航海船が寄港できるほぼ唯一の港だった。那覇が港湾都市としてめざましい発展を始めるのはこのときからである。

1372年 明は琉球中山王国を朝貢国として承認した。ここから琉球と中国との500年に及ぶ公的な関係が始まる。明は琉球を交易国家として育成すべく朝貢回数と寄港地を無制限

にするなど優遇、民間貿易勢力の受け皿として、海域アジア世界の秩序化を図った。

いっぽう、1374年 南九州を支配し海外交易を熱心に行っていた島津氏久は、明に朝貢を申し込んだが却下された。また、大隅の悪党人(倭寇)が高麗で狼藉を働くなどという記述がある。重要な地位を確保した琉球に比べ、島津氏初め南九州の海上勢力は信頼できない危険な集団、つまり倭寇そのものとみなされていたらしい。

1389年、明から那覇へ、交易・航海のための人材スタッフが派遣された。この「久米村」と呼ばれる華人集団は、琉球の通商・外交になう専門家組織だった。つまり海禁体制下で琉球はいわば明の代理店を務めるようになったのである。明の海禁には国民の海外渡航禁止が含まれるのだが、実際にはむしろ中国商人の海外流出とネットワーク化を進めることになったのだ。琉球中山王朝はこれら中国人スタッフを抱えることでいよいよ中継貿易国として成長し、東南アジアと東アジアをつなぐ存在となった。

琉球は明への朝貢を軸に、主に中国の絹織物や陶磁器などを日本や東南アジアへ、また自国の硫黄、小型馬、日本の刀、屏風、扇子、東南アジアの胡椒、蘇木(蘇芳)などを明へ運んだ。同時に琉球は、高麗、後には李朝朝鮮との交易を開始した。

こうして、屋久島の周辺では大海賊時代が動き出し、南ではアジアをまたにかけた琉球の大交易時代が始まった。こういった荒々しくもめざましい経済活動の傍らで、森林資源を有する屋久島は、東シナ海を駆け回っていた貿易船や海賊船からはどのように見えていたのだろうか？屋久島の島民ははたして何をしていたのだろうか？山の神への畏れを口実に沈黙していることが、はたして許されたのだろうか？あるいは…

種子島家の活動

15世紀初め、屋久島の周りではさらに重要な動きがあった。まず1401年、足利義満が、倭寇の取り締まりを条件に冊封を受け、日明勘合貿易を開始(10年1貢)。1404年に第1回遣明船を送る。これに島津氏も関わる。おそらくは硫黄の供出を担当していたのだろう。

1410年、琉球使節は堺に入り室町幕府に進貢。これに対し1415年、足利義持は琉球王尚思紹に返書を送り、日琉の交流が始まった。幕府は兵庫に琉球奉行をおき、琉球船を歓迎した。海賊世界が終わり、三国の国交は正常化しスムーズなものになった。これを機に堺商人は南海路を使い、薩摩・坊津と競合するなど、合法的な経済も盛んになった。

1408年に、島津元久が一時島津領になっていた屋久島・口永良部島を再び種子島家に与えたのも、こういった動きの中で、種子島氏との関係を重視したからだろう。さらに1412年島津久豊が、三島(硫黄島、竹島、黒島)を種子島清時に与えた。薩南海域はすべて種子島に任せ、という配置だ。

ところが1419年 足利義持は、何を思ったのか朝貢体制は屈辱だとして派遣を中断してしまった。この一方的な国交断絶で、日本は再び公式貿易ルートを失い、南海路の重要性がより高まった。1429年 中山王国が琉球を統一し、その力はいよいよ大きくなる。琉球は次第にその勢力範囲を北へ広げる。

琉球は軍を持たない平和な国だったと思う向きもあるようだが、とんでもない。琉球は強大な海上勢力だった。

一方、国交断絶によって、東シナ海の治安はまたもや悪化する。そして種子島氏の動きが激しくなる。治安悪化の当事者だとみざるほかない。

1424年 明船が竹島に漂着、これを種子島家の某家老の船団が襲い略奪したことがばれ、某家老は切腹、三島は島津家によって没収となる。この事件について種子島家譜ではやや違う書き方をしているが、海賊的状況の中で、記録上正当性をとりつくりつつある感じがするのでとりあえず割愛。種子島氏も島津氏も武装した海の豪族であり、その実態は海賊と表裏だからだ。

さて、1436年 種子島幡時(はたとし)が家督を継いだ。この人は面白い島主で、天健の法(修験道)に熱中し、なんと毎年熊野三山へ詣でたという。室町時代にである！実は熊野神社も寺社と同じような経済的大企業体で、単に参拝だけのために熊野へ行っていたと考える必要もないだろうが、その行動力はすごい。

幡時は航路の行き帰りに、途中の日向細島に必ず寄港していたそう。実はここの定宿の黒木氏の娘が側室というか、まあ現地妻で、毎年出かけるのはこの女性に会いたかったからかもしれない。この黒木氏の女性は、細島の妙国寺という日蓮宗寺院と関わる可能性があり、だとすれば非常に面白い。2人の間に生まれたのが、後に日蓮宗の種子屋久布教を推進する種子島時氏だからだ。

一方で幡時は島津用久(好久)と盟約を結び、対琉球最前線にあたるトカラ列島の臥蛇島と平島を与えられている。幡時は、じつに紀州熊野からトカラ列島までを行動圏とする、雄大な海の領主だったのだ。

ところで、1438年、琉球にはすでに日本の禅宗が進出していた。琉球王朝は十刹(官寺・官僧)を制度化し、禅宗ネットワークを活用して対日外交を行っていた。十刹は、対明外交の久米村と並ぶ、琉球の外交の中樞だった。

1441年、琉球は奄美大島を平定し、さらにその版図を広げた。1450年にはトカラを勢力下におく島津氏・種子島氏との間で紛争が勃発。関係は悪化し、臥蛇島が両者の分割統治となり緊迫した。

日本側では1449年 細川勝元が兵庫で琉球船の積荷(7~8万両相当)を没収。また島津氏は南九州を通り琉球へ向かう商船から略奪をおこなう。これはまさに倭寇の再開であった。琉球王国の鼻先をひっぱたくように、この頃から後期倭寇の時代が始まったのだ。

日蓮宗の種子屋久布教

海外進出して外交ネットワークを広げる禅宗に対し、かつて種子島・屋久島をおさえていた律宗は凋落していた。かわりに登場したのが日蓮宗である。(日蓮宗は時代によりさまざまな流派に分かれるが、ここでは全体として取り上げる)

15世紀前半、現世利益を認める日蓮宗は、商工業者に支持されて京で急激に発展した。牛窓、鞆の浦、広島と瀬戸内

海航路の港湾都市に拠点を築き、さらに日向、飫肥(日南)へと南海路の主要港伝いに勢力を広げ、15世紀後半には、種子島布教に成功した。

日蓮宗による種子屋久布教のいきさつは、種子島家の家督相続とからんでなかなかのドラマ仕立てになっている。

1458年 日向細島で生まれた時氏が、幡時の嫡男として種子島へ迎えられた。このとき、律宗の僧侶でありながら、修業先の畿内で日蓮宗に宗旨替えて帰島した日典が弾圧をうけながらも布教をはじめていた。

ところが1462年 幡時が、犬城海岸にある魔立ノ岩屋で修験道の修行中に死亡したのである。若い時氏が群臣の支持のもと家督を継ぐ。

この時をもって、種子島はそれまでの律宗や修験道の混沌とした宗教感満ちた時代から、日蓮宗の時代へと明確に移り変わる。幡時はそのために暗殺された可能性もある。

いっぽう1463年に 日典が死去する。石子詰の法難にあったとされる。しかしこれは、日蓮以来、布教に試練を組み込むストーリーパターンにそった伝承である可能性もあるようだ。

日典の遺志を継ぎ、1465年、京都本能寺から日良が来島した。日良は種子島時氏の後援を得て、種子島・屋久島の布教に成功したとされる。このとき時氏の跡目相続を支持した叔父の基道が、日蓮宗の受け入れに反対するが、時氏一日蓮宗体制を支持する群臣に敗れ、種子島家は一丸となって日蓮宗へ改宗した。

先にも述べたように、日蓮宗のような教団は、強力な企業体である。これを誘致することは、種子島を経済的に活性化することにほかならない。

また日蓮宗側の動きとしては、悪化の一途をたどる瀬戸内海の治安に見切りをつけ、南海路に転じるべきだという読みがあったのではないかと考えられる。

1467~1477年 応仁の乱。勘合貿易の利権を大内氏と競う管領細川氏は、大内氏支配下にある関門海峡を通行できなくなった。そこで九州南周りの南海路に転じ、一帯の制海権をにぎる島津氏と警護の契約を結んだ。この動きから飫肥、山川、赤尾木(西之表)などの港の経済活動が活性化し始めた。

さて、日蓮宗の布教に対し、屋久島はすんなりと受け入れずに抵抗したふしがある。この状況は「山が鳴動した」いわれるが、状況はよくわからない。そこで1488年 時氏の招きにより、京都本能寺/尼崎本興寺より日増が屋久島へ来島した。

日増は種子島から屋久島に渡り、永田岳に登り法力を持って山の神を鎮めたとされる。山の神は白いシカの姿になって消えたため、新たな名を与え、経文を埋経したという。これによって屋久島布教が完了し、日増の開山により種子島時氏は宮之浦の久本寺や安房の本佛寺を開基した。

この日増による山の神折伏が、その後の嶽詣りの始まりだという解釈もある。嶽詣りはそれ以前からある修験道の春の峰入り行事が伝わったもので、日増がオリジナルだとは考え

にくい。しかし江戸時代の嶽詣りには、山の神に対しそのシーゼンのヤクスギ伐採の許しを得るという内容が含まれるので、嶽詣りの社会的機能として説得力がある。

その後が面白い。1489年 日増は本能寺へ帰るが、3年後の1492年 本能寺寺務職(寺の事務統括職)に昇進し、1494年には本能寺権大僧都、貫首となり、日蓮宗のトップに立つのである。現代で言うなら、若手管理職が、担当した事業が成功し、その功績をもって取締役役に抜擢され、その直後に社長に押されるようなものだ。

このような大物がなぜはるばる屋久島くんだりまで来たのか。逆に考えると、屋久島布教がそれほどまでの実績になるとしたら、それは何ゆえか。考えられるのは、屋久島の布教=支配がなんらかの大きな利益を生んだことだろう。

木材の需要とヤクスギ伐採の始まり

15世紀には日本の外洋航海船の基本設計が変わっている。それまでの「準構造船」は丸木船から発展したもので、船底にクスノキの大きな割材(かわら)を使い、側面を板で貼るものだった。ところがこのころクスノキの大木が払底し、船底も板で作る棚板造りの「構造船」が作られるようになったのだ。そして船材といえばまっすぐ割れて板を作りやすく、水に強いスギ材が優れている。

屋久島の大森林には膨大なスギ材が眠っている。そして薩南海域では、応仁の乱による南海路発展にともなう造船材や、おそらく輸出材の需要が高まっていたはずである。

種子島にはヤクタネゴヨウがある。これにはかなりの大径木があるため、丸木船に利用されているが、虫に食われやすく造船向きとはいえない。

港湾都市として発展を始めた赤尾木(西之表)に必要なのは、船の修理や新造のできる船大工と、船釘の鉄、そして造船材だ。鉄は古来種子島で作られていた。ところがスギ材は種子島にはなく、屋久島にあった。状況からみて、おそらく前岳と呼ばれる前衛山群のスギは、古くから伐採利用されていただろう。しかし今に語り伝えられるように、奥岳のスギは山の神が祟るため、うかつに切ることができなかつたとされていた。

ところが日増上人はその法力をもって山の神を制圧し、日蓮宗の下に置いた。お題目を唱えれば神の祟りは気にしなくてよくなり、奥地のスギの開発が可能になった。この功績を認められ、日増は総本山本能寺のトップに上り詰めたのではないだろうか。

このことを裏付けるかもしれない事実がある。1520年 管領細川高国は、種子島家に遣明船の建造を発注し、種子島氏は翌年これを納品しているのだ。遣明船は200トン級の大型構造船だと思われるが、これがヤクスギ製だった可能性が高いというのが、郷土史家山本秀雄先生の仮説だ。

種子島氏の屋久島出先機関は、楠川城だった。楠川の浜では多量の砂鉄がとれ、城之川の斜面にはかつてたたら製鉄の跡が残っていたという。砂鉄からは造船用のさびない船釘ができる。そして楠川から山に向かえばすぐに白谷雲水峡

の森があり、そこには島内でもっとも古いと思われる無数のヤクスギ切り株が残されているのだ。

また種子島から屋久島に、造船・航海技術者集団だった「浜津脇衆」が来ていたふしもある。楠川城を拠点に、種子島の造船技術者が船を作っていたのではないかとこれも山本先生が残された魅力的な仮説である。

日良法印は京の文化人でもあり、種子島に京のさまざまな文化を伝え、生涯の最後を日良のために建てられた種子島の浄光院で過ごしたとされる。江戸時代に制作された「屋久島大絵図」を見ると、白谷雲水峡の南にある現在の楠川前岳の位置に、浄光坊山という名が記されている。日良は日増に先だって屋久島にも布教しているらしいが、あるいは楠川でのみ布教に成功し、それが白谷雲水峡の開発を可能にしたのかもしれない。楠川は方広寺用材を切りだしたという牧五郎七の伝説を残し、古くから伐採の歴史をもつところだ。この浄光坊山という古名は、日良と屋久島伐採のかかわりを記録するものではないだろうか。

布教に対する屋久島の抵抗は、もしかするとこの外部から訪れた急激な変化と開発に対する、不安や反発の現れだったのかもしれない。

しかし屋久島は結局日蓮宗を受け入れた。種子島氏は戦国の動乱の中で、島津氏と婚姻関係を結んで傘下に入り一体化の動きを強めてゆく。そしてこれ以降、屋久島の森では、島津氏の影響下で、しだいに本格的な開発が進んで行くのである。

①鎌倉時代初頭の北条得宗=種子島氏宗祖の屋久島領有 ②鎌倉時代後期の千鶴氏の「やくのしましもこおり」領有 ③室町時代初頭の種子島氏による屋久島領有 ④15世紀後半の日蓮宗布教

この稿で取り上げた直接屋久島にかかわる歴史的記述は主にこの4点だけである。しかしその事実の周辺にはこのように激しく展する日本史、東シナ海史が流れている。その激流の中に4つの事実を置いてみることで、かすかな屋久島の記憶が生き生きと動きだしてこないだろうか。

出典

種子島家譜
三国名勝図会
鹿児島県の歴史 山川出版社
周辺から見た中世日本 日本の歴史14 講談社
蒙古襲来 網野義彦 小学館文庫
鹿児島島の湊と薩南諸島 吉川弘文館
日宋貿易と「硫黄の道」 日本史リブレット75 山川出版社
琉日戦争一六〇九島津氏の琉球侵攻 上里隆史 ホーダーインク
鉄砲伝来前後 種子島開発総合センター編 有斐閣
上屋久町郷土誌
屋久町郷土誌
屋久島歴史小年表 山本秀雄編
天文法華一揆 今谷明 洋泉社 MC 新書
戦国仏教 湯浅治久 中公文庫
熊野修験 宮家準 吉川弘文館

Calendar・2011-12

2011

- 6/12 市川 屋久島自然クラブ『高盤岳』
 6/17 ガイド連絡協議会ゴミ拾いに参加・白浜
 6/20-21 小原 佐渡エコツアーガイド養成講座講師
 7/9-24 岡田 NZより里帰りアルバイト
 7/13 松本 屋久島自然クラブ『スノーケリング』元浦
 7/15-18 風カルチャークラブ・アカテガニの産卵
 7/26 TOK スポーツクラブ小学生磯遊び受け入れ
 8/11 市川 屋久島自然クラブ『イソモン獲り』矢筈管理棟
 8/16-17 東京私立中学高等学校協会生物の先生研修
 8/19 市川 NHK アーカイブス取材・ヤクスギランド
 8/20-31 岐阜県立森林文化アカデミー西岡里子短期研修
 8/26-28 教員免許更新講習・岡山理科大学
 8/29 福井県 SSH ヤクスギランド研修
 8/30-9/3 岡山理科大学エコツーリズム技法実習
 9/16-18 松本 屋久島太鼓で青森浪岡町のイベント遠征
 9/23-24 倉敷芸術科学大学縄文杉登山講師
 10/9-10 松本 東京環境工科専門学院スノーケリング実習
 10/12-14 鳥取東高校研修旅行受け入れ
 10/13 市川 屋久島自然クラブ『前岳参り』
 10/15-18 キャラバンサライ・ツアー受け入れ
 10/19 市川 屋久島ブック2012取材
 10/20-23 松本 二戸復興支援エコツーリズム大会
 コーディネーターとして参加
 10/27 松本 風カルチャークラブ・ツアー説明会
 10/31 市川 雑誌取材・大雨で白谷からランドへ変更
 11/5-6 松本・小原 JICA 研修講師
 11/6 小原 屋久島自然クラブ『植物観察』
 11/26 小林 事務退職・長い間ご苦労様でした。
 12/1 市川 自然保護協会聞き取り調査に協力
 12/18 松本 環境省世界遺産シンポジウム
 サンゴモニタリング事例発表
 12/31-1/3 風カルチャークラブ・年越し太鼓ツアー

2012

- 1/2 市川 MTB ポタリングツアー開始・高平～尾之間
 1/17-30 池田 自動車2種免許取得教習
 2/1-2 松本・小原 JICA 研修講師
 2/9 小原 野外救命救急講習
 2/13-16 風カルチャークラブ・はじめての屋久島
 2/15 松本 日本エコツーリズム協会企画委員会出席
 3/1 市川 京都新聞取材
 3/4-6 松本 モニタリング1000検討会に参加
 3/16 小原 屋久島高校環境コース実習
 3/28 松本 屋久島自然クラブ『春のタイドプール』
 4/7-8 小原 WMA 野外救急救命講習・前橋
 4/14-20 市川 ボルネオ・ブルネイツアー講師、池田参加
 4/22 市川・池田 トッピーのクジラ衝突事故に巻き込まれる
 4/24-26 JICA 研修受け入れ
 5/21-22 道新観光ツアー受け入れ

Contents

巻頭言「屋久島で忘れていた何かを思い出す」	松本 毅	1
トッピーvsクジラ騒動記	市川 聡	2
レッツ・ゴー！ジャングル!!珍獣珍草ハント	池田裕二	6
安上がりごはん	櫻村精一	8
冬の北海道遠征	比留間雄太	10
コラム・屋久島銘水うどんを食べよう！	池田裕二	11
コラム・屋久島のおみやげは・・・笑顔	松本淳子	11
屋久島の歴史・鎌倉時代から日蓮宗布教まで	小原比呂志	12

- 5/31-6/3 風カルチャークラブ・シャクナゲと発光キノコ
 6/7-27 JR ホテルとの提携ツアー実施
 6/8-10 松本 海辺の環境教育フォーラム参加
 6/11 松本 日本エコツーリズム協会エコツアーカフェ出演
 6/12 松本 日本エコツーリズム協会理事会出席
 6/16-17 松本 風の旅行社主催東北支援シンポジウム参加
 6/24-7/1 小原 中国雲南省スタディーツアーに参加
 6/25 島内宿泊施設関係者へ体験ツアーを実施
 6/29-7/1 自由の森学園修学旅行受け入れ

執筆・取材記事

- ・屋久島の地質ガイド (市川、小原他共著) 屋久島環境文化財団
 屋久島の地質を最新情報で構成した現時点での決定版ガイドブック
- ・屋久島ブック2012 (市川) 別冊山と溪谷社
 白谷雲水峡の森歩きを紹介。半日の取材で、入口近くだけだったのですが、十分に美しい森を紹介できました。
- ・屋久島トレッキングサポートBOOK2012 (市川) NECO MOOK 1753
 白谷の取材でしたが大雨のためヤクスギランドに変更。おかげでヤクスギランドの素晴らしさをお伝えすることができました。
- ・両親に贈りたい旅 (市川) A-Works
 世界の旅 26 選の中で、国内で唯一屋久島が取り上げられました。「両親に贈りたい旅ってどこですか？」と聞くと「縄文杉です。」と答えたので、「それでは親殺しになりますよ。」ということで、縄文杉に行かなくても楽しめる屋久島の旅をプロデュース。

編集後記

☆世の中、不信だらけですが、自然は決して裏切りませんね。(た)
 ☆リニューアルした事務所で皆様をお迎えます。(じ) ☆ブルネイ
 国王はかつて国民のためにマイケルジャクソンの無料コンサートを
 開催したそうです(ゆい) ☆YNAC 事務所で屋久島情報室を閲覧でき
 ます。おもしろ動画など貴重な情報満載です。(さ) ☆最近の休日は、
 あえて体を休めないように心がけています。(ゆひ)

YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.29

発行日: 2012年7月20日

発行: (株)屋久島野外活動総合センター

住所: 〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦 368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-0945

E-mail: forest@ynac.com URL: <http://www.ynac.com/>

Facebook <http://www.facebook.com/Ynacyakushima>